



青苗雜發句集
地

洋学文庫
文庫 8
B 130
2



栗本青蘿發句集

秋之部

秋

ぬけてはれ 芽の端の先や秋の秋
 松は蟬啼は 秋の後りゆく
 あたふあふ 秋風をちぬかぬ人
 美乃戸のふりや今秋と暮の秋
 秋き川や人さきつゝ中乃店
 蚤ぬるよ 袖り合ぬ今秋の秋
 夜瘦はぬく けさ秋

起卧之立馬の秋を庭の中
去用より羽鳥鳴く今秋は秋

七夕

とくぬ世はきまりと星乃逢秋は
糸の戸乃年法つたりや藤の夏
海士う子の乾ぬ神とり一連一
曉の築り高まり天の川
空掬とんぬよも星のふれう南

魂祭

娘しやとま世の人れ魂祭り

ほし合らうとまひーはよ魂祭り
なり一向のかたをらうなり魂祭

野分

芭蕉薺の野分ふらよ来よ坊う居
岩角とまらうかき駒の野分う南

相撲

母親しん返くれきり角力丸
勝角力まをと嘆へさ男の南

秋風

あせ夏は黄くく初まり秋の風

一はくり萩をわの秋の風
胡魚と突かちうよたりぬ秋の風

稻妻

いふはまのささく穂よ通し田圃に
稻妻や今朝よりあはれ落紅を

萩

風乃るや並あしき家まの萩
大粒く並あきしそは肌

萩

朝魚や清きかみりとほれたあは

萩や横目きしよとよは上
梅乃ほ萩のよかは一輪と
あ川を萩の朝魚乃よよは

蘭

茶はよも雨を破る小似しきり
らふの香やととく初る目乃極り
蘭のよや糸なれ帯はととく
らよは香や茶盤の面打つきり
茶乃よもを落さけ月の白ひら

女郎茶 蕃椒

雲よりとむし秋又逢きり女郎花
兵此矢先よ似たり唐か〜

秋蝶 秋蚊

秋の蝶いふ家花を秋の花
志〜くと羽よ目のきたや秋の蝶
秋風よ白蝶果と相ひきり
秋乃故や木のれは〜とまもる

虫

む〜此書やふほれと解つて萩の
糸夏此化〜てや床のたう〜に

虫の書に朽〜ワ家あ〜が
少〜か〜年〜又〜並〜り〜き〜り〜に
棚〜と〜や〜ま〜も〜ぬ〜に 蟋蟀
妄想乃縁是縁けんたう〜に
松ぞ〜よ〜美人乃神よ宿〜死よ

萩

吹ふる中海〜萩花はうりう華
暮る〜らと縁縮み涙ん家あ萩
志〜萩やいさ〜ひら〜らと花初家

月

月と家の中よ今もなけけしれたか
赤門と踏出たよりきよの月
あふひえく月のあつ路を離れより
花もとも支ん今も家の月けなると
名月や地より川智家人の川
名月や春の秋中よりひをせり
名月や松よがれに松は 意
名月やぬくるふはけく流之戸
まよ危し人よ嘆くく月んあ軍
等とりそ四隅よりワ家月んが

松風は森さんよりうりうり月
育きあよりたよきき教派自んが
靴あよ月けあよりりの葉さるる軍
癖よりあよりそ森しれぬ月け秋はバ

天明のうか秋年よあつ松とつくと
己午五つ六つ来のまよなれりと風あ
はいくきひう人のあつ路を離れ
あ穀とせうおよまをむきよとんく
まよい軍しちよ及一隊もいと輝けり
まよよ下れる世とたりあんとせり
名月のあえはあそまよなれり秋早
て清小月んは秋あつ路を離れり
まよみのりてやとめをまよけり
あつて玄約洗海のあま東園洪翁思ま
あつてあつ路と船よはまよあり井川の
あつてあつ路と船よはまよあり井川の

予も時時乃法陣と推つてく此歌を
あつたなりぬ

猶此夏の過ぎると今も月月の雪
中六歌や園うらなれんをまゝくま
いさよひやまきこ一ハ切家柿は淡
既らとくをふかくれよんち茶葉乃香を
いさよひや芭蕉此上の皆月 歌
飛まつら月や友まは店の歌は庭

秋雨

秋は雨月う舞して猶忠一
秋鳥や一羽鳥乃啼一依前

砧

とよよ風お打たれぬきぬく哉
うささう川と人や笑らん小歌作

蕎麦茶

此頃の銀河やなほて我をなほ
月と雲よむまひやまらんこの巷

鷹

鷄

去秋と極る夏路や丁此去り
羽高きくつてをそ一月の丁
いくはくも丁は依前とありよきり

机母花匂くして何中へはかゆいそ
粟は穂やひふふの月もく啼 新

麻

麻は声言振乃白雲ふさゆるなり
森時ふや戸又吹付る麻の声
町中へよれくむぬ急忠麻
角乃とくり曉の月や麻は声
驅やちよふ霞曉の麻乃声
其けくくと渡し魚ある新の麻

菊

三日月よふく日家さくくの蒼引
憎きまきく菊に愁ある隣り菊
雨は葉かられると家けいそ哉

市中深居吟

葉の魚も市乃魚さて和下地家

後月

曉ハまふとの霞や後の月
後の月蕎麦よ時雨のうらも所ね

尾巻

秋の月やうらるれあわのむく尾巻

既くおれ色と秋始る尾ふり角

鶏頭

鶉の美な秋も時とほろり
鶉のや倒れ日と色始る

秋暮

戸口より人新しぬ秋の暮
栞よもあけぬもよる秋の暮
秋の暮陸海もよる秋の暮
かむれい海もよる秋の暮
秋の暮い海もよる秋の暮

雑秋

中くふ月入日の秋り山
木とくれし夏よりほけぬ秋り
秋風とあやふく抽る赤らん
方よあや秋と家か小萩の肌
川いもなまやつ子の蔭に赤
落栗や翌乃命も山の真

紅葉

水より中流り岸のまらみ
ふり門よまお玉月のとみちうれ

嵐山

山も川も苔もあらしの紅葉が

暮秋

秋の月あつとさうけくもちどり
うけとありを待たぬるに夕暮の光
せまりけ秋や豊かく園の土
け秋や雪のあられよあをうまし
風きてて小雲さう添又秋くれぬ

冬之部

晴雨

井裏舎

初ーられ自立此井よ吹かれ
籠せー此死あく晴也初ーられ
梅嫌小粒よ赤ー初禮 礼
ーられきりた持あく家芋かー性
二秋之夜森是こつー何あう軍
いぬおさまりて何あすおとさる後の
井れられあまもすゆなり
何不や小糸の魚をけり小取明也

芭蕉忌

瘦像よ魂を入る小萩一しりれ

あつしは浦よ神く
いせとまといとあまのり

流流より時あまをあり月も照

夏よくに芭蕉忌と
んん

弱んす夏の一しりれい淋よとく

茶花

柔のふかやありとも人のえぬとら

らやの花のういも似よつら

麦荷

蕎麦刈

荷はけし萩より持り忌の麦

持はうりやよふれし神も分り

大根川

雪あや園の月あよ大根川

忠度の腕ふれんよと大根川

枯野

二日月よりけしきりし林聖代

茶の本んく麦よふれけく枯野代

本うり

本うりしや二葉吹り家園は麦

雪と僅に氷は本朝——面白——

氷

氷軟や雪よふふ草と草履
松風の落るはありて原も
阿比岐分交果と添ふは六甲り式

千鳥

沂ろろる夜高き星うさよふちり
かくふとり廿七軟は月乃海
あき月や風の飛ろよ啼ちとり
た母よの吹れ軟事やうちとり

水鳥

あきやのこころは人共顔
た母花羽よ月さけ驚ろるに森に

介鷗

駛ましく来り歸きりみとわ、わ
黄糸赤糸おれろねう介鷗
捨石のうけく飛りりみとわ

生海胤

若しとをふかれて勃く生海胤
うた人のうたも似るか海う軍

雲

神一もやあむりくの芦は紫小
燈火のそりて氷依一もあう南
志く果よ赤くきりまの朝
止灰竈

まゝか海や焼人えく程き
崖竈やまはし夕煙り

埋火

埋火よ松風落家舎き、代
埋ちや梅の苔もあきくまれ

茶のあむる喜とくみ月姑
星くまふとに

埋火やいくあうあまる鼻けら

大鉢 大桶

長明の火よかせさのちうるれ
うはきくもせまをいふねとしる
あるい埋火とかれおひしてを乃森
是と友とん

う記時々唐かさちく大鉢式
桐大桶あうく花のあ海あり

鉢叩

ふ髪より細き世や強ん鉢叩
鉢きくさを乃力の何とけは

冬籠

きぬるや世を定ぬ茶も冬籠
みど籠茶はく高と籠一きり
みど籠扱とり乃病時を垣し

雪

初雪や突と降の二尺藪枵子
えい〜と降よ高あり扱の雪
雪のまゝあよもほぬけしやが
面ふや神と〜ハ禱乃ま
雪の扱やよまれ〜は梅句よ

雪の人んぬ世は友の風情の事
あつ海苔井よぬは句の扱乃高
別荘や賑はひも扱は高
あつ居きたに置まかすは高乃
大書の扱と打出は景色は高

寒念佛

はらひ子とほ声きと〜寒念佛
川筋や子もふかた高寒念佛

冬月

鳥飛く高屋檣の冬月

芒海一人魚浮きり言の月

雑多

園は麦茶の本とたふと眺らむ
炉はくまや先ありはきく母の顔
烟苗苗くくおきくおのふ
雪よ耳もやいん梅 嫌
今も海は空くくくくく
山茶花や夜顔むく茶中
曉乃ふくく氷らん細代 ち
初雪の流はくくあり地 把れふ

年忘

夏は世の夏とん家るや
まの忘れ忘れよ着海着意の
うたはよ似一焚やや一

茶茶

りてやのりらとらくお田はひ
りてやるとよれく半はく
悠くもややても謎波の橋乃
世の外は身も脚乞のあー

海のは脚あ店とさう
きへり

年の市ふききれ出たり峰の傍
たのよきよ枝ありあえ川年此梅
子尋あれ硯の海も年乃波

かくれてもらふべきはあつたれうも
又たらう

年一やまの枯藤此あはれふ
白ひーらまよやう今除ねの梅

去れ悲ーたれ秋風の樂子ききく
屋ーあの手よ海あり曲とややはる
藝ーまはははふきれく人の年と
うりあふーせんともやうは獨ま
まはりあーま自りあはれと
まはりあふ

ね母ーあう松風吹けよ除ねの園

